

スキーと人生

社会医療法人 緑社会 金田病院
理事長・病院長 金田 道弘

実は、私は子供の頃からスポーツが大の苦手だった。ただ一つだけ、楽しくて小1から今まで52年間ずっと継続してきた生涯スポーツ、それがスキーだ。

ところが、最近10年間にそれまで想像もしなかった苦しいスランプの数シーズンを経験した。結果的にはこれが貴重な体験となった。それは、カービングスキーが誕生し、スキー用具の革命的進化に対応する形でスキー技術も大変革期を迎えていた時期だった。全日本スキー連盟の指導教程も変化していった。本やDVDで勉強して頭では理解したつもりでも、果たして40年以上の間に体に染み込んだ自分の滑りの、どこをどう改良すれば新しい用具の性能を引き出す質の高い今風の滑りになるのか、複数のスキースクールに入ってもみたが、わからなかった。一方異業種のスキー仲間達は、私の何倍も滑走日数があり、滑りの技術はみるみる進化していった。

そんなスランプから抜け出せずにはいた4年前に、私は師匠に巡り会った。冬は新潟県、広島県、兵庫県等のスキー場のスキースクールで校長として指導し、夏には家のあるニュージーランドで日本からの長期ツアー客にスキー指導をしていた。年間滑走日数はなんと250日。1年間の大部分は雪の上にいる現役プロスキーヤーだ。その師匠が、昨シーズン岡山県新見市のいぶきの里スキー場のスキースクールにインストラクターとして赴任することが急遽決まった。

私は迷わず50歳以上限定のお得なシニアシーズン券を直ちに購入、師匠から1単位2時間の実技指導を受けるため、週末に時間を見つけてはいぶきの里スキースクールに通った。小型ビデオカメラを持参し師匠の滑りと自分の滑りをお互いに撮影し毎晩欠かさず復習した。イメージしていた自分の滑りとあまりに異なる自分の姿に愕然とすることからすべてが始まった。今まで見えなかったスキー技術の真髄(?)が少しずつ見えていった。同時に数年ぶりにスキーが楽しいと思えるようになった。結局のところ、最新のスキー技術云々ではなく、スキー技術の基礎基本が全く理解も実践もできていなかったことに50年以上経って初めて気づくことができ

た。振り返ってみるとシーズン中に14回もいぶきの里スキースクールに通っていた。

スキーシーズンは限られている。さらに、上昇する年齢と忙しさ、一方で下降する体力と時間。自らの内と外のこの厳しい現実の中、いかに効率的に上達できるかが最大のテーマだ。解決策は、プロのスキー道場に入門し修行を積むことだった。真剣に学ぼうとすると、師匠も真摯に応えてくれた。「若くもない、平生運動をしていないから体力もない、しかも忙しくてなかなかスキー場に来ることもできない、そんな三重苦の先生(私)でも上手くなれることを証明するのがプロの仕事、私の責任。」と言ってもらった時には、感動で震えた。師匠56歳、弟子58歳の真剣勝負の日々は、さながら修行僧のようだったと思う。ただ、毎回新たな自分を発見できたことは何より嬉しく、ありがたく、楽しかった。

ところで、私がこのスキー場にいる間に場内で発生した、約10名のケガ人に対する師匠からの救護要請には100パーセント応需し、全日本スキー連盟公認ドクターパトロール岡山県第1号の医師としての務めも果たすことができた。この時だけは師匠と弟子の立場が逆転する、ちょっと誇らしい瞬間でもあった。ちなみに、新見市内の救急当番病院が大部分は応需してくださったが、どうしても受け入れが困難な場合は、止むを得ず隣接する真庭市のK病院に救急搬送依頼した。

スキーシーズン中は毎年合宿のようだ。考えてみれば、人生そのものも期間限定の合宿

なのかも知れない。これからも様々な人生の師匠から学び、楽しく逞しく生きて、少しでも社会に貢献できればと願っている。緊張感と感謝を忘れることなく精進したい。

